

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32630

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20196

研究課題名（和文）リスク社会における専門知の位置とその再編：「証拠」概念の歴史に着目して

研究課題名（英文）Expertise in risk society and its transformation: Focusing on the concept of "evidence"

研究代表者

松村 一志 (Matsumura, Kazushi)

成城大学・文芸学部・専任講師

研究者番号：70909358

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：リスク社会の特徴の一つに、専門知に対する信頼と不信の分極化がある。この点について、ウルリッヒ・ベックは、科学の外部への「科学的論証」の浸透が個別の「科学的知見」の相対化を引き起こしたとの仮説を示している。本研究は、ベックの仮説を歴史社会的に検討し、その精緻化を目指した。具体的には、「科学的論証」の重要な要素である「科学的証拠」概念の展開に着目し、科学の内部と外部における「証拠」の多元化が進んだ結果、内部と外部のズレが系統的に発生し、科学の提示する「科学的証拠」が科学の外部では通用しなくなるというメカニズムが働いていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リスク社会論においては、リスクの取り扱いに関する経験的分析が進められ、科学の内部と外部の関係も研究されてきた。しかし、科学の外部における真偽判定の基準については、明らかになっていない部分が多い。本研究は、「証拠」および「科学的証拠」の概念に着目することで、科学の内部と外部の真偽判定のズレやその形成過程を明らかにした。以上の作業はまた、専門知への不信にどう対応していくかという今日の問題に取り組むための重要な判断材料を提供する意味を持つ。

研究成果の概要（英文）：The polarization of trust and distrust toward expertise is one of the several features of the risk society. In this regard, Ulrich Beck has pointed out that stronger dependence on the scientific argument brings about a denial of specific scientific opinion, which experts propose. In this study, I reconsidered Beck's theoretical hypothesis empirically from the view of historical sociology and refined it, focusing on the concept of "scientific evidence," an essential element of the scientific argument. As a result, it is shown that diversification of the concept of "evidence," both inside and outside of science, generates a systematic gap between the two and interrupts the diffusion of scientific opinion.

研究分野：科学社会学

キーワード：リスク社会 エビデンス 専門知 信頼

## 1. 研究開始当初の背景

現代社会はしばしば「リスク社会」として特徴づけられてきた。科学技術の発達とともに、新たなリスクが生み出され、その分配をめぐる問題が浮上する。原発事故やパンデミックは、まさにこうした特徴が顕在化した出来事だが、その中で、専門知の位置づけをめぐる混乱が生じている。一方では、専門知への信頼が高まり、マスメディアには専門家が頻繁に登場した。しかし他方で、そうした専門家を疑う「陰謀論」に代表されるように、専門知への不信もまた高まっている。こうした専門知に対する信頼と不信の分極化は、いかにして発生しているのか。現代社会の状況は、専門知に対する不信のみ見出されることが多いが(例:「ポストトゥルース」)専門知に対する信頼が広がっているからこそ、不信が意識されていると考えられる。したがって、信頼と不信の併存状況こそが問われなければならない。

この問題を考える上では、ウルリッヒ・ベックの所説が参考になる。ベックの『危険社会』(第7章)によると、リスク社会(第二の近代)において、非専門家の人々は「科学的論証」にますます依存するようになるが、それにより、科学の外部から科学を批判することができるようになり、個別の「科学的知見」には却って依存しなくなるという。この説明は示唆に富むものだが、ベック自身はこれを経験的に検討したわけではなく、あくまでも理論的な仮説に留まっている。以上から、本研究は、ベックの仮説の妥当性を歴史社会的に検討することを課題に設定した。

ただし、ベックの議論の中では、「科学的論証」とは何か必ずしも明確に特定されていない。そこで注目したのが「証拠」概念である。「証拠」にも「法的証拠」や「歴史的証拠」等があるが、科学はそれらと区別される「科学的証拠」を形成した。「科学的論証」の重要な構成要素としての「科学的証拠」の広がりに着目することで、ベックの仮説を経験的水準に落とし込むことができる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、専門知に対する信頼と不信の分極化のメカニズムを検討することにより、現代社会のあり方をより適切に捉えることである。具体的には、科学の内部と外部における「科学的証拠」のズレが「科学的知見」の相対化をもたらしているという仮説的な見通しのもと、そのメカニズムを解明することを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究の課題および方法は、大きく三つに分けられる。

(a) 科学の内部での「科学的証拠」の形成: 19世紀以来の科学における「科学的証拠」概念の歴史的展開を明らかにする。この作業はさらに、19世紀における「法的証拠」と「科学的証拠」の分離、「科学的証拠」の新たな形態としての「エビデンス」概念の形成、の二つの局面に分けられる。本研究の主題は「リスク社会」(第二の近代)にあるため、がより重要な課題となる。具体的な作業としては、1990年代に確立した「エビデンス・ベースト・メディシン」(EBM)のテキスト類を対象に言説分析を行うことで、従来の「科学的証拠」概念と「エビデンス」概念とのズレを特定し、20世紀後半における「科学的証拠」の変容を明らかにする。

(b) 科学の外部における「科学的証拠」の広がりとは「科学的知見」の相対化: 科学の外部における「科学的証拠」の扱われ方を検討することで、「科学的論証」の広がりとは「科学的知見」の相対化の関係を解明する。そこで注目するのが、科学の通説を否定する「科学否定論」(science denial)と呼ばれる動きである。これは、「科学的証拠」を取り入れつつも、「科学的知見」を否定しているため、両者の関係を捉えることに適している。「科学否定論」の代表的な論法を抽出し、そこで用いられる「証拠」を(a)で得られた「科学的証拠」と比較する。

(c) 理論・方法の再検討: 研究に使用する理論・方法に関する考察を行う。とくに、言説分析・アクターネットワーク理論・社会システム理論の関係を検討し、科学的言説・実践に関する社会的アプローチを洗練させる。

## 4. 研究成果

(a) については、「エビデンス・ベースト・メディシン」における「エビデンス」概念の特徴を、従来の「科学的証拠」概念と比較した。「エビデンス」が従来の「科学的証拠」の延長線上にあることは了解されているものの、その固有性は十分に理解されていない。「エビデンス」の重要な構成要素は「ランダム化比較試験」(RCT)だが、これは自然に関する因果メカニズムを立証するための「証拠」であり、「実験的証拠」と「統計的証拠」の組み合わせとして把握できる。クロード・ベルナルの『実験医学序説』に見られるように、19世紀の時点では両者の組み合わせは自明でなかった。両者を結びつけた上で、「実験的・統計的証拠」>「実験的・準統計的証拠」>「準実験的・準統計的証拠」>「非実験的・非統計的証拠」という序列を暫定的に導入し、「科学的証拠」が一枚岩ではないことを示したところに、「エビデンス」概念の特徴があると言える。このように捉えることで、「科学的証拠」の概念史的展開における「エビデンス」概念の意味が明確に捉えられるようになった。

(b)については、「科学否定論」の性質に関する分析を行った。科学哲学における「科学否定論」の特徴づけを参考にすると、「科学否定論」は「疑似科学」と「陰謀論」の結合体だと見なすことができる。これに対応して、「科学否定論」の「証拠」もまた、自然に関する因果メカニズムを示す「疑似科学的証拠」と、専門家による「陰謀」の存在を示す「陰謀論的証拠」の二種に分けることができる。前者は「科学的証拠」の基本前提をある程度共有するものの、その基準を十分には満たさないため、通常の科学とは異なる「非科学的知見」の生成を可能にする。科学の外部においても、「実験的証拠」や「統計的証拠」といったイメージ自体は浸透しているが、その組み合わせ方や序列化の可能性は十分に浸透しておらず、結果として「科学的証拠」概念が拡散していると考えられる。一方、後者は、因果メカニズムではなく、「陰謀」という出来事存在に関する「証拠」であり、「科学的証拠」(やそれに準ずるもの)とは性質を異にする。こちらは、専門家の提示する「科学的証拠」の信頼性を毀損する。「科学否定論」において通常の「科学的知見」が棄却されるのは、これらのメカニズムの複合によるものと捉えられる。

(c)については、今日の社会学・科学論において先端的な理論・方法に当たる言説分析・アクターネットワーク理論・社会システム理論の比較を進めた。その結果、いずれのアプローチも、社会学の基本的な発想の一つである「分化」の考え方を否定する方向に収斂していることが明らかになり、この方向で理論・方法を洗練させる必要があることが明らかになった。

(a)～(c)の成果の一部を、まずは著書『エビデンスの社会学』において発表した。その上で、より発展的な分析を進めつつ、学術誌・学会発表・ウェブメディア等を通じて発表した。今後はこれらを研究論文としてまとめ、発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松村一志	4. 巻 51(1)
2. 論文標題 方法を理論として読む：社会学的想像力のフロンティア	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三時眞貴子， 福田敦志， 隠岐さや香， 松村一志， 杉田浩崇	4. 巻 90(1)
2. 論文標題 学問研究の基盤としての知の創造と蓄積	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 156-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松村一志	4. 巻 33
2. 論文標題 リー・マッキンタイア著，大橋完太郎監訳，居村匠・大崎智史・西橋卓也訳，2020年，『ポストトゥルース』人文書院．	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 コミュニケーション紀要	6. 最初と最後の頁 69, 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松村一志
2. 発表標題 教育の知と「エビデンス」：教育学における「非定量的蓋然性」のゆくえ
3. 学会等名 日本教育学会第81回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松村一志
2. 発表標題 測ることの歴史と現在：科学論から考える測定の変容
3. 学会等名 測ることの社会科学 第6回研究会（東京大学社会科学研究所）（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松村一志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 393
3. 書名 エビデンスの社会学 証言の消滅と真理の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「やたらと“エビデンス”を求める人」と「陰謀論にハマる人」、その意外な共通点  <a href="https://gendai.ismedia.jp/articles/-/91226">https://gendai.ismedia.jp/articles/-/91226</a>  エビデンスの有無で証言を疑う「はい、論破」は正しいか？ 信頼できる“科学的証拠”の歴史  <a href="https://www.cyzo.com/2022/04/post_306535_entry.html">https://www.cyzo.com/2022/04/post_306535_entry.html</a>  社会学者 松村一志さんが読む『英国心靈主義の抬頭』 わたしの仕事と工作舎の本#3  <a href="https://note.com/kousakusha/n/n989b0cdd7805">https://note.com/kousakusha/n/n989b0cdd7805</a></p>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------